自由律俳句協会ニュースレター23号　２０２３年６月17日発行

投句欄　自由律の泉　⑲

1　さりげなくこちら向いてる銃口が気になる　久光　良一

2　煩悩ですか　いや引っ越し荷物です　金澤　ひろあき

3　月明かり　梅の白浮く　大岳　次郎

4　風も雲も春　アカホリ　フキ

5　何の訳か孤老が井守を飼った　小山　榮康

6　踏みしめた道有る踏青の野一人歩く　木村　浩

7　むなしさに風穴　無　一

8　途中まで虹が出るくしゃみ　野谷　真治

9　空からチュンチュクの声　亡夫（あなた）だったのね　増田　壽惠子

10　明日へ干す布団　息子が帰る　見崎　厚志

11　醜さも美しさも吸い込む桜の慈愛　竹内　朋子

12　こんなにも心踊る　孫は希望の春　山本　説子

13　空にまだ月があるからキャベツの力走　井尾　良子

14　悪態つく女の唇は滅びない基地　黒瀬　文子

15　逆光　シャー芯ポキッと折れる　原　さつき

16　ポーチの落としもの亭主の写真入れたまま　平岡　久美子

17　入学にハンドル支えママ前屈み　田中　直心

18　夢に見る君はいつも列車の窓外　檜　幽可

19　昔とおんなじ産まれたての「オギャー」　ちば　つゆこ

20　本のカバーはクラシカルな包み紙　佐川　智英実

21　父もいない母もいない　夕立　部屋　慈音

22 今日も遅れる山手線内回りの人生　平林 吉明

23 こんなに良い天気を不安が歩いている八十路　富永 鳩山

24 月を指す指をみつめる赤ん坊　青井 こおり

25 春陽のうらら蝶二つ輪になって上る　佐瀬 風井梧

26 無駄に動いてせっかちが汗まみれ　富永 順子

27 青天とおいハッピーエンド　篠原 紀子

28 コート脱いであなたの所へ南風（はえ）が誘う　荻島 架人

29 葬儀土産の菊も枯れ果ててさようなら　湯原 柳泉洞

30 先生おりてきたはつ夏のターミナル　さいとう こう

●泉 ⑱より　一句鑑賞

懐かしいよりもニガイ思い出ふきのとう　木村 浩

▼〝ニガイ〟とはどんな思い出なのでしょう。我家の蕗は、今の家に落ち着くまで四回借家を変わりました。その都度、持ち歩きました。蕗の薹から茎まで、うれしく、おいしく味わっていますよ。

（増田 壽惠子）

我慢の磁石になって生きる幸せ　竹内 朋子

▼何故だかわかりませんが、このような生き方がしたいと、いつも思っています。謙虚で強い磁力をもっている。我慢の磁石は絶対強い。「我慢の磁石」いいです。気に入ってます。

（田中 直心）

いつも妻の「だいじょうぶ」長く患う背に　見崎 厚志

▼五年つき添った老妻は「ありがとう」と言って、逝った。詠者の妻は「だいじょうぶ」と言っている。長く患う背に幸せを覚えました。

（小山 榮康）

父、母へ日常の話して墓の前　黒瀬 文子

▼コロナ禍の前に、父の七回忌。来年は、母の十三回忌をむかえる。墓参りに行こうと思う。「日常の話」を大切にしたい。（野谷 真治）

▼平凡で何もない、でも幸せな日常が続いている。そう感じさせる句です。

（見崎　厚志）

いっぱい笑った今日自転車は月の光を浴びていた　井尾　良子

▼よく感情が動いた時は、何でもない事象が特別な風景に見えたりしますが、表現にファンタジックな夢幻の可能性を感じました。

（アカホリ　フキ）

▼時間の経過にドラマがあり、映画を観ているようです。昼間の楽しかった一時、その余韻を月の光を浴びている自転車が思い出している。そんな美しい情景が浮かびます。自由律ならではの一句です。

（平林　吉明）

立春大吉きのうの遺書を書き換える　平岡　久美子

▼立春大吉、気分的に良い事があったのでしょうか。新しい出発という感じもします。それに比べ「きのうの遺書」はシリアスな内容なのかな。気を取り直して柔らかく。最後にこの世に残す言葉ですしね。

（金澤　ひろあき）

▼私は毎年、どこかしらを書き換えています。そう、終活ノートであります。立春の大吉なら、それはそれは、よいことと、よろこんで書き換えたいものです。遺書は、公正役場で公正証書にしないと、争いの種になります。

（大岳　次郎）

▼遺書を書き換える――いつかは来るその日を想定した明確な覚悟。それを実行するのは立春大吉とは、何てぴったりなのだろう。明と暗が見事に共鳴している句と思いました。

（原　さつき）

▼遺書という重いものを一日で書き換えた。その心境の変化の理由は立春大吉で示されている。相当気分のいいことがあったに違いない。リズムもいいし、読み手をニヤリとさせてくれる。

（部屋　慈音）

▼「立春大吉」で書き換えられる「遺書」とは恐らく「昨日」何か嫌なことあって、ご家族との諍いでもあったのでしょうか。今日は「立春」気分新たに近くの神社に参社して、御神籤引くと「大吉」、気分良くして昨日のことはその場で水に流してという句であって実際に遺書を書いても。書き換えてもいなくて、気分一新して帰宅したことを「遺書を書き換える」と隠喩した一句ではないでしょうか。

（檜　幽可）

▼作者は今日きっといいことがあったのだろう。昨日落ち込んだのに、今日は一転福がきた。「立春大吉」がすべてを物語っているし、「きのうの遺書を書き換える」の表現が見事です。

（ちば　つゆこ）

機嫌のいい自分にあいさつする朝の鏡　部屋　慈音

▼機嫌のいい自分を客観視する、どこか冷めた視線に複雑な感情を感じました。私も、朝一番の自分の顔にありのままの気持ちが表れるような気がします。鏡のなかの自分の姿は、取り繕っていても隠し切れないものまで映ってしまうようです。機嫌のいいのは表面的なことで、本当はどうなのでしょう。

（篠原　紀子）

執着も失せ払えばはらり落ちる雪　佐瀬　風井梧

▼「はらり落ちる雪」さっぱりと清々しく小気味良い表現だと思いました。

（竹内　朋子）

春を待つ花とならんで日向ぼっこ　　荻島 架人

▼どんなお花と日向ぼっこでしょう。優しく温かい句に、なんだかほっこりしました。

（山本 説子）

ちさい靴初初詣　　田中 直心

▼初詣が初めての経験であることはあたりまえですが、あえて「初初詣とすることで幼子の「初めて」が浮かび上がります。「ちいさい」を「ちさい」としたところも、本当に小さくてかわいらしいさまがあらわれているのではないでしょうか。

（青井 こおり）

▼初心者でむずかしい事は分かりませんが、風景が目に浮かぶようです。初・初の感じも好きです。

（木村 浩）

▼はつはつもうでの音と、ちさい靴のそれはちいさい様を想起させるのが良い。靴初初詣の漢字がずらっと並ぶ感じも視覚的に面白さを憶えた。ぽてぽてと歩く。

（湯原 柳泉洞）

平和の為の兵器という救いようのないセンス　　富永 順子

▼日本にも核兵器を配備しておけば、攻められないという人がいる。核兵器は危険で高価なお飾りなのだろうか。使ったら世界が滅亡する兵器を、お飾りとして置いておくというセンスは確かに救いようがない。

（久光 良一）

▼平和の為の兵器なんてあるわけがない。原爆を二度も落とされ多くの命が失われたこと、もう忘れてしまったのでしょうか。憲法を変えて国民をまた戦争へとつれていくのでしょうか。本当に腹が立ちます。

（井尾 良子）

▼確かに、救いようのない・・・。

（無 一）

ふきのとうからキミへの愛が天ぷら　　大迫 秀雪

▼愛の入った句は苦手なのですが、生きることへの真剣さが感じられて好感を持ちました。好きな人と美味しい物を食べる幸せ、単純なことが難しい時代になりましたね。

（佐川 智英実）

喋ったら終わりの酒流し込む　　平林 吉明

▼下戸は呑めない上に呑んだ時の気持ちも良く分からない、この句は喋ったからすっきりしたということか？　いやいやもっと込み入った思いがあるのだろう。

（平岡 久美子）

●係より

「第３回自由律の泉賞」を左記のように開催いたします。そのため、次号ニュースレター発行時には通常の「自由律の泉」はお休みとさせていただきます。ぜひ「第３回自由律の泉賞」への参加をご検討ください。

第3回 自由律の泉賞 投句募集

同封の投句用紙またはメールにて、１人２句（未発表の自由律俳句）をお寄せください。締め切りは２０２３年８月10日。前回同様に投句者による互選で賞を決めます。今年はほかに新たな賞も設けられる予定です。（ニュースレターNo 23に詳しい募集案内を掲載しています）。

これまで「自由律の泉」に投句されたことのない方も、この機会にぜひご参加ください。会員外の方も歓迎です。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。